

令和 6 年 5 月 10 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13457

研究課題名（和文）国内外の大学における聴覚障害者教員の教育的貢献は何か—混合手法による接近—

研究課題名（英文）The Contribution of Deaf Faculty in Higher Education: A Mixed Methods Study

研究代表者

矢部 愛子 (Yabe, Manako)

筑波大学・人間系・特任助教

研究者番号：40890439

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：聴覚障害大学教員への支援体制の拡充には、支援による聴覚障害教員の能力が向上、及びその授業を受けた学生への教育効果についても実証することが必要である。そこで、本研究では、聴覚障害教員の授業を受けた国内外の学生を対象に、混合研究法を用いて、学生は聴覚障害教員の授業を高く評価していることを明らかにし、聴覚障害教員への情報保障の確保とその支援の課題を確認した。続いて、国内外の聴覚障害教員を対象に、学生時と教員になった後の支援体制の相違点について調査した。その結果、学生時と教員時の情報保障のみならず、複数の大学で働いた場合には大学によっても支援体制の質が異なることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

13カ国にまたがる国際調査により、聴覚障害教員と学生と両方から、国によって支援制度が異なるが、聴覚障害教員への支援拡充、大学専門の手話通訳者の充実、国際手話通訳の資金的援助について、必要という意見が多く挙げられた。また、聴覚障害教員の授業の価値を経済的に評価したところ、学生の評価額は高く、財政的支援に見合った社会的貢献が期待できることが明らかになった。さらに、本研究手法は、聴覚障害だけでなく、他の障害教員の授業評価の参考にもなりえるなど、学術的意義が高いと言える。加えて、本研究成果の実践は、障害教員支援の一層の拡充と学生への教育効果のさらなる拡大が期待される点で、社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：To enhance the support system for deaf and hard-of-hearing (DHH) faculty members, it is critical to demonstrate that the system effectively engages DHH faculty members and evaluates the benefits for students who took classes taught by DHH faculty members. The study employed a mixed-methods design, involving university students who attended classes taught by DHH faculty members, as well as DHH faculty members working at mainstream universities both internationally and nationally. The findings indicate that university students showed higher total values for DHH faculty classes, underscoring the importance of disability accommodations for DHH faculty members. Furthermore, the study examined the experiences of DHH faculty members with disability accommodations at their current, former, and alumni universities. Consequently, the differences in the quality of the support system between faculty and students were identified, despite both groups receiving disability accommodations.

研究分野：社会福祉学

キーワード：聴覚障害教員 大学生 混合研究法 仮想評価法 情報保障 国内外の高等教育 国内外比較 社会的貢献

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

国内外の高等教育機関では、聴覚障害学生に対する支援体制が充実し、研究も進化している一方、聴覚障害教員に関する支援体制は十分と言うに程遠い(Harpur and Loudoun 2011; Gibson 2012)。従来の研究では、聴覚障害教員の支援体制の乏しさを述べるものがほとんどであり、聴覚障害教員の授業を受けた学生の利益や価値観はあまり追求されていない(Saltes 2020)。聴覚障害教員の支援体制を拡充するためには、聴覚障害教員への支援による能力の向上、その授業を受けた学生に対する教育効果について実証することが重要である。

## 2. 研究の目的

本研究では、支援費用が高額と言われる聴覚障害教員を対象とし、聴覚障害教員による教育的貢献を分析し、支援の費用対効果を明らかにする。質的量的分析混合手法(Creswell and Clark 2011)を用いて、聴覚障害教員の授業を受けた学生に対して、授業の価値を経済的に評価する。また、学生の時と教員の時の支援有無によって教員の能力の発揮の過程について、明らかにする。本研究は、以下の問いに答えることを目的とする。

- (1) 学生は聴覚障害教員の授業をどう評価しているのか。
- (2) 大学に勤務する聴覚障害教員が支援を受けることで、教育活動や社会活動をどのように拡充できたのか。
- (3) 学生時と教員になってからの大学の支援体制の格差は、聴覚障害教員の能力の発揮にどのような影響を及ぼしたか。

## 3. 研究の方法

- (1) 聴覚障害教員の授業を受けた学生に対する説明的デザイン分析(量的分析から質的分析へ)

まず、仮想評価法(Mitchell and Carson 1989)を用いて、授業価値の経済的評価を行う。具体的には、聴覚障害教員の授業を受けた学生に対し、その授業を受けるために通常の授業料に比較して、余分に支払ってもよい金額を質問する。回答方法は、いくつかの金額から支払ってもよい最大金額を被験者に選択させるペイメントカード法による。そして、学生の評価額の平均値を、受講可能な学生数に乗じた金額によって、聴覚障害教員の授業価値を推計する。次に、オンラインアンケートへの協力を申し出た学生に対し、オンラインインタビューを実施する。聴覚障害教員の授業を受けて、どのような利益を得たか、その授業の価値はどのようなものであったかについて、学生の授業評価額とその理由について因果関係を明らかにする。

- (2) 聴覚障害教員に対する探索的デザイン分析(質的分析から量的分析へ)

まず、国内外の聴覚障害教員に対して、学生時と教員になってからの支援体制の相違点を詳細に聞き取り、支援の有用性や効果を定性的に明らかにする。インタビューは、日本手話、英国手話、米国手話、国際手話、英語、日本語を用い、オンラインで実施する。次に、質的分析で得られた因果関係の妥当性を検証するため、聴覚障害教員に対してオンラインアンケートを実施する。質問内容としては、教員の社会的属性、および大学に勤めるようになってから、現在と以前の大学の支援体制や支援がもたらす活動成果の相違点である。量的データの回答をカテゴリー化することで質的データとつなげ、聴覚障害教員の教育的貢献、および支援による能力発揮を帰納的に分析し、質的分析結果の妥当性を検証する。

## 4. 研究成果

- (1) 国内外(日本、カナダ、米国、ガーナ、スウェーデン、インド、香港)で聴覚障害教員の授業を受けたことがある学生(104名)のオンラインアンケートを集計した。続いて、学生(19名)とインタビュー実施した。

アンケート結果によれば、授業自体に関心がないなどの理由から「支払わない」を選択した17名の学生の評価額はゼロとした上で、聴覚障害教員の授業に対する学生(85名)の平均支払額(評価額)を計算すると、10,328円/年間であった。学生の出身国や彼らが教育を受けた国の制度が支払意思額に及ぼす影響を分析するため、米国・カナダ(45名)、日本(24名)、ガーナ(16名)の3グループに分けて授業評価額を比較した。特に、日本の学生の評価額は全国合計

で91億円と推測され、920人の聴覚障害教員を雇う価値があることが明らかになった。全国の大学は788校であり、各大学に少なくとも1名の聴覚障害教員を配置できる可能性があるという結果となった。

学生が、聴覚障害教員の授業に対して余分に支払っても良い理由としては、障害を持たない教員と比べて、聴覚障害教員の授業から学ぶ価値がある、聴覚障害教員の授業に関心がある、聴覚障害教員を支援したいなどの理由が挙げられた。また、余分に支払いたくない理由としては、障害有無は教育効果に関係ない、経済的負担が大きい等の理由も挙げられた。他方、授業評価額については、障害を持つ学生(18名)のそれは障害を持たない学生(79名)と比べて有意差がなかったが、余分に支払っても良い理由として、聴覚障害学生(11名)に特徴的なものは、聴覚障害教員のロールモデルの重要性が挙げられた。

(2)国内外(日本、英国、カナダ、米国、ガーナ、スウェーデン、ドイツ、ベルギー、ノルウェイ、アイルランド、フィンランド、南アフリカ、オーストラリア)の大学で勤務している聴覚障害教員(25名)にインタビュー実施した後、聴覚障害教員(57名)にアンケートを行った。アンケートの結果、学生時と教員になった後の両方で情報保障があった教員(35名)、学生時には情報保障があったが、教員になってからは情報保障がなかった(7名)、学生時には情報保障はなかったが、教員になってからは情報保障があった教員(13名)、学生時と教員になってからも情報保障はなかった教員(2名)であった。また、複数の大学で勤めたことがある教員(38名)では、以前の大学で情報保障はなかった教員(6名)がいた。

情報保障の種類としては、手話通訳(44名)、文字通訳(20名)、FMシステム(2名)、視覚聴覚資料(23名)、その他(8名)であり、なんとか読話術で対応する教員が11名もいた。その中で、重要会議であれば通訳等の支援が得られるが、重要性の低い会議では支援がない、自分のFMシステムを用意する、同僚のノートテイクで対応する等を挙げた教員もいた。また、文字通訳においては質や種類がさまざま、プロの文字通訳者の雇用や、同僚によるタイプチャット、UDトーク利用等の支援も挙げられた。

また、学生時と教員になってからの両方とも情報保障を受けても、あるいは以前の大学と現在の大学で情報保障を受けても、支援体制の質が異なるという点も挙げられた。さらに、高等教育機関における支援金源や支援制度が異なっていた。情報保障の支援費用については、日本、米国やオーストラリアでは主に大学がまず負担するが、英国、カナダ、アイルランド、ドイツ、ベルギー、オランダ、スウェーデン、ノルウェイ、ガーナでは国が直接負担していた。この他、日本や米国は大学からの支援金の拡充、その他の国々では大学専門の手話通訳養成の拡充や国際手話通訳の支援の必要性があることが挙げられた。

結論として、聴覚障害教員の授業に対する学生の評価額は高く、聴覚障害教員による教育・社会活動の拡充の効果が期待できる。それゆえ、このような効果の実現に向けては、高等教育機関における、聴覚障害教員やその教育の意義に対する理解と啓蒙、手話通訳の養成が必要と考える。

## 参考文献

Creswell, John W., and Clark, V.L., 2011, *Designing and Conducting Mixed Methods Research*, Sage Publishing.

Gibson, S., 2012, "Narrative Accounts of University Education: Socio-Cultural Perspectives of Students with Disabilities," *Disability & Society*, 27(3), 333-369.

Harpur, P. and Loudoun, R., 2011, "The Barrier of the Written Word: Analysing Universities' Policies to Students with Print Disabilities," *Journal of Higher Education Policy and Management*, 33(2), 153-167.

Mitchell, R. C., and Carson, R.T., 1989, *Using Surveys to Value Public Goods: The Contingent Valuation Method*, Resources for the Future.

Saltes, N., 2020, "Disability Barriers in Academia: An Analysis of Disability Accommodation Policies for Faculty at Canadian Universities," *Canadian Journal of Disability Studies*, 9(1), 53-90.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Manako Yabe	4. 巻 -
2. 論文標題 Deaf faculty's effective and ineffective communication access in higher education	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Conference Proceedings of the 86th Association for Business Communication Conference	6. 最初と最後の頁 45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Manako Yabe	4. 巻 11(3)
2. 論文標題 Analysis of the costs of accommodation of deaf faculty members and the benefits of deaf faculty classes for university students: An international comparison	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Canadian Journal of Disability Studies	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Manako Yabe	4. 巻 -
2. 論文標題 Evaluation of disability accommodations in higher education: A comparison of international university students' perspectives on deaf faculty	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Conference Proceedings of the 87th Association for Business Communication Conference	6. 最初と最後の頁 157-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 矢部愛子	4. 巻 -
2. 論文標題 国内外の高等教育における聴覚障害教員への支援体制についての評価 学生と教員の視点からの国際比較	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 第19回障害学会オンライン論文	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 矢部愛子	4. 巻 18
2. 論文標題 情報保障で広がった世界ー米国で学んだ高等教育と社会活動ー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 障害学研究	6. 最初と最後の頁 20-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Manako Yabe
2. 発表標題 Deaf faculty's effective and ineffective communication access in higher education
3. 学会等名 86th Annual Association for Business Communication Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Manako Yabe
2. 発表標題 Reframing deaf rhetoric
3. 学会等名 University of Illinois at Chicago, Department of Disability and Human Development (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Manako Yabe
2. 発表標題 What is deaf rhetoric?
3. 学会等名 University of Illinois at Chicago, Department of English (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Manako Yabe
2. 発表標題 Evaluation of disability accommodations in higher education: A comparison of international university students' perspectives on deaf faculty
3. 学会等名 Association for Business Communication Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 矢部愛子
2. 発表標題 国内外の大学における聴覚障害教員の教育的貢献は何か ー混合手法による接近ー
3. 学会等名 2021年度障害科学学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Manako Yabe
2. 発表標題 Contributions of deaf faculty members in higher education: A mixed methods study
3. 学会等名 87th Annual Association for Business Communication Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Manako Yabe
2. 発表標題 Disability accommodations in higher education: Comparison of the international perspectives of university students and deaf faculty members
3. 学会等名 Deaf Academics Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Manako Yabe
2. 発表標題 Enhancing the role of deaf faculty members in higher education: An international comparison
3. 学会等名 Heriot-Watt University (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Manako Yabe
2. 発表標題 Enhancing the role of deaf faculty members in higher education: An international comparison
3. 学会等名 University of Central Lancashire (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Manako Yabe
2. 発表標題 Enhancing the role of deaf academia: An international comparison
3. 学会等名 York St. John University (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Manako Yabe
2. 発表標題 Enhancing the role of deaf faculty members in higher education: An international comparison
3. 学会等名 University of Wolverhampton (招待講演)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Manako Yabe	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 119
3. 書名 Enhancing the Role of Deaf Faculty Members in Higher Education: An International Comparison	

〔産業財産権〕

〔その他〕

SIGNS@HWU People: Dr. Manako Yabe <a href="https://signs.hw.ac.uk/people/dr-manako-yabe/">https://signs.hw.ac.uk/people/dr-manako-yabe/</a>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------